View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

基礎看護技術演習における GID 学生受け入れに関する教員の葛藤と対応

藤井徹也 *,1)、篠崎惠美子 1)、高橋佐和子 1)、中山和弘 2)、玉腰浩司 3)、井本美奈 4)
(1) 聖隷クリストファー大学、2) 聖路加看護大学、3) 名古屋大学、4) 豊橋創造大学)

【目的】性同一性障害を有する学生（以下：GID 学生）受け入れに関する現状や共に在籍する学生への影響、臨地実習における受け持ち対象者への影響と対応について明確にするため、基礎看護技術演習における GID 学生の受け入れに関する教員の具体的な対応と葛藤などを調査したので報告する。

【方法】対象：看護系専門学校、短大、大学の基礎看護技術担当者 701 名（1 校 1 名）に対して、研究協力依頼を行い、GID 学生の受け入れ経験があった 14 名。データ収集方法：インタビューガイドを用いて、30 分から 1 時間程度の半構成的面接調査を実施。面接はプライバシーが保てる個室にて、1 名の研究者が実施。対象者に承諾を得た上で、IC レコーダに録音。同時に対象者の「性別」「勤務場所」「受け入れの抵抗感」「GID 関連の研修の参加の有無」などを質問紙にて調査。データ分析：面接結果は、逐語録を作成して、意味のある 1 文をデータとして抽出した。データ抽出は、研究者間で検討し妥当性保持に努めた。倫理的配慮：聖隷クリストファー大学倫理審査委員会の承認（容認番号 11055）を受けた。対象者には、研究の趣旨、参加の自由、匿名性の保障など書面を用いて説明し、同意書をかわした。

【結果】対象者は、全て女性であった。勤務場所は、３年課程の看護専門学校が 7 名、大学が 7 名であった。受け入れ時の抵抗感「あった」が２名であり、教員経験は２年と６年であった。GID 学生受け入れについては、２名の教員が２名の GID 学生受け入れを体験していた。GID に関する研修会は２名が受けおり、文献などで調べたことのある者は、６名であった。今回の GID 学生のパターンは、生物学的性別が男性で自己認識の性別が女性の場合が６名、その逆が 10 名であった。戸籍変更をした学生は１名いた。また、退学した学生が４名認められ、周りの学生へカミングアウトができず、学生内で孤立となった事例であった。基礎看護技術演習で特に考慮した単元は、「清拭」「陰部洗浄・清拭」「車椅子の移乗」であったが、担当者間で検討を重ね対応したことで、該当学生とそのグループ学生への指導で葛藤や困難な状況はなかった。本調査で、基礎看護学演習・実習よりも領域別看護学実習、ジェンダーに関する講義、該当学生を不快と感じる教員への対応について困難な状況が明らかとなった。

【考察】結果から、基礎看護技術演習の指導上では困難さや葛藤は認められなかった。今回の対象者が、事前の対応や指導内容を十分に検討していたためと考える。また、該当学生を不快と感じる教員の存在が明らかになったことは、GID 学生の受け入れに関しては、必要な研修や知識の習得ができるような環境整備が必要であると考えられる。

【今後の課題】本研究の目的は GID 学生受け入れに関する現状や共に在籍する学生への影響、臨地実習における受け持ち対象者への影響と対応について明確にし、教育指針を作成することが最終的な目的である。今年度で基礎看護学領域の内容を把握できた。次の課題として「領域別看護学での実態」を把握することが課題である。

【発表状況】　第 32 回日本看護科学学会学術集会にて発表予定である。